

# 人生を楽しむ

国語科 齋藤安教

平均寿命が短かった時代は、「人生僅か五十年」と言われ、人の一生はどのように送ろうと、ほんの50年くらいの短い間に過ぎないと考えられていた。私もこの世に生を受けてから既に半世紀を越えたが、今や日本は世界に最たる長寿国となり、私などはまだまだ尻の青い未熟者で、人生を語ることなど恐れ多いことである。しかし、去る3月11日、東日本に未曾有の大震災が起こり、この私も少なからず今命あることの有難さを痛感した。仕事に追われる毎日だが、できれば楽しい人生を送りたいと常々思っている。ここでは、今夏私が味わったささやかな楽しい思い出を綴ろうと思う。

李白の詩の中に「人生意を得ば須らく飲を尽くすべし」という言葉がある。人生ははかないから、できる時に楽しんでおくのがよいという意味だ。陶淵明の詩の中にも「盛年重ねて来らず 一日再びあしたなり難し 時に及んで当に勉励すべし 歳月人を待たず」という句がある。元気な若い時は二度と来ない。一日のうちに朝は二度訪れない。だから、若いうちに人生を楽しんでおくべきである。時というものは人を待ってはくれないから。「勉励」は、今は勉強するという狭い意味で解釈され、教訓の意をこめて使われているが、李白も陶淵明も無類の酒好きで、二人にとっては、酒を存分に飲むことが人生の大いなる楽しみであった。陶淵明は、酒を「忘憂物」と表現し、酒はこの世の辛いこと、苦しいこと、悲しいことを忘れさせてくれるものであった。陶淵明は役人として無能なつまらぬ上司の下で働く辛さ、5人の勉強嫌いの息子を持つ苦勞などを、詩作や読書、酒で癒したのである。

『論語』の学而篇の初めに「学びて時に之を習ふ、亦説（よろこ）ばしからずや。朋有り、遠方より来る、亦樂しからずや。」とある。学んで、その学んだことを折に触れて復習するのは、理解も深まり自分の身についていくこともわかるので、何とも言えず嬉しいものである。志を同じくする友が遠方から訪ねてきて、学問について話し合うのは、実に楽しいことではないか。

私は、自分の意に反して今年の4月本校に異動した。1年の担任で、そのまま残れば当然2年の担任になるはずであったが、突然乗りかかった船から降ろされてしまい、途方に暮れた。慣れ親しんだ生徒達との別れは、とても辛かった。しかし、本校に赴任早々1年の担任となり、ソフトテニス部の顧問となり、仕事熱心で優秀な若い先生が多く、優しい同僚や素直で真面目で可愛い生徒達に囲まれ、今ではとても幸せな毎日を送っている。ただ、前任校には私が異動した後、技術指導のできる顧問がおらず、それが一番の心残りだった。毎日部員の傍にいて見守ってやるのが顧問の指導として大切なことだが、もうそれは叶うまい。本来なら腰をしっかりと据えて本校の生徒諸君と行動を一緒にすべきところだが、幸い本校のソフトテニス部には、とても若くて熱心で優れた顧問の先生がいらっしゃる、了解を頂いて代休を利用し、私費で前任校の夏合宿に三日間参加した。もとより三日間指導したところで大した役には立てないが、前任校も大勢の1年生部員を迎え、ソフトテニスという同じ道を志す者達と触れ合うことができ、楽しい時間だった。終わってすぐ本校の合宿を引率したが、生徒諸君は厳しい練習に耐え、寝食を共にし、まだ浅いつき合

いとはいえ、やはり同じ道を志す者達の集まりゆえに密度の濃い交流が出来たし、心を通わすことができた。のべ八日間涼しくて空気の良い山中湖で、いい仲間と過ごせて幸せなひと時だった。

『孟子』に「君子に三楽有り」とあり、「天下の英才を得て之を教育するは三の楽なり」とある。教師にとって、優れた者を育て上げるのは楽しい。先日高体連主催の新人大会で、2年生の女子の1ペアが32本（6回戦進出）に入った。「青は藍より出でて藍より青し」という慣用句がある。弟子が師よりも優れることの喩えだ。私は彼女達と関わって数か月しか立っておらず、私が育てたというわけではないが、今まで顧問をしてきて一番活躍した部員でも64本止まりだったので、身近に接してきた者がいい結果を出してくれて、実にうれしい。私は高校2年の時の新進大会で16本に入った。その記録に肩を並べ、越える弟子が出れば、指導者として本望である。

1年生の古典講習を終えた日の夜、独りで新潟・山形の旅に出た。新潟県柏崎には親友がいて、彼と旧交を温めるのが目的だが、元々は中学・高校時代の部活の後輩であるが、なかなかの読書家で、彼から刺激を受けることが多い。以前二人で良寛ゆかりの地を訪ねたこともある。今回も美味しい酒の肴に盃を傾けながら、読書談義に花を咲かせ、とてもいい時間を過ごした。山形県鶴岡では、高く聳える杉木立の中に立つ羽黒山五重塔を訪ねた。天然記念物になっている杉達が国宝の五重塔を取り囲み、長い間風雪から守ってきた。前任校の離任式の挨拶では、恐れ多くも自分をこの国宝に喩え、生徒達や先生方を杉木立に喩えて、私を長い間守り、支えてきてくれたことに深く感謝した。

酒田や鶴岡は港が近く、魚介類が旨い。気に入った寿司屋に入り、ひとりカウンターに座って、主人との会話を楽しみながらおすすめの寿司を握ってもらうのは、旅の中での無上の喜びであり、私にとって最高の贅沢である。

旅の中では、ゆったりとした気分でいられるし、とても居心地がよい。生徒諸君も同じように、学校の中でも教室内も部活の場もリラックスして過ごせれば、さぞ楽しかろう。しかし、「楽有れば苦あり」、「楽しみは憂ひに生ず」という言葉もある。夏の炎天下で自ら部活の厳しい練習に励んでいる諸君、自ら講習に参加する諸君は、苦しみを乗り越え、それを克服してこそ得られる真の楽しみがあることを知っている者達だ。学校は、生徒諸君にとって居心地の良い場所、仲間との会話を楽しめる場所、生徒同士・教員同士・生徒と教師が支え合って生きる場所であってほしいが、一方でしっかり目標を持って、張りつめた空気の中で生きる力（頑張る力、我慢する力）を養う場でなくてはならない。

